岷江入楚

あかし

和書門 類
二七九一一 號
八七 函
一三 架
五四 冊

内閣文庫
和 書 類
二七九一一 號
五四 冊
二〇三 函
八 架

内閣文庫		
番號	和	27911
冊數	54 (13)	
函號	203	28

国立公文書館
National Archives of Japan

明治十三年購求

明石

廿六歳　自三月廿日乃秋まてのことを志るす

雨風猶不休事

自二條院御使来事

雷落廊焼事

又夢見故院給ふ也　住吉社導可離此浦ことなり

三月十二日明石入道献御舟奉迎源氏君也　十三日ニ宮越し也

源氏君乗船渡明石事　浜館有様也

書御文令帰京使事

明石入道参源氏君中宵物語也

四月更衣装束也

弾琴廣陵散事

明石入道弾御前琵琶事　入道語吾娘能弾箏ことなり

入道語心中所願奉行住吉社及十八年之所求也　入道又弾箏也

又之日遣消息於君之宮事　入道書也示事

次日又遣書ス明石上書返し事

物語
引馬文庫
国立公文書館
National Archives of Japan

御門御夢奏見故院事　二月十二日
二條太政大臣薨逝事
八月十二三日比ゟ御馬出来迄宿給事　對面明石事
遣書於二条院事
源氏書給〻二条院君同書給事
廿七歳
正月主上御薬事
七月廿日源氏帰京宣旨事
明石上懐妊事　六月比之事
帰京前二三日向明石上許合物音情別事
於難波修禊事
帰京先二条院給事
従二位任権大納言之事　去大将事
八月十五夜初参内事
使帰之次遣消息於明石事
筑紫五節見奉文於源氏事

明石

明石巻名　河光源氏自須磨浦移于此所、依之
抄 巻名以哥并詞所号源氏二十七歳の二月より同二十七歳の秋帰
京せしまでのことをのせたり
諺にいふかうしたかうしゝ此巻の紀ハ前巻にひとしく 箋曰年月
注 源氏二十六歳の二月十二日より明石の浦にうつりたまふ也
とある

猶雨風やまん

二月一日より十二日まで雨風やまずなかりけれハなく是ハ
いまだこともまれなるのほとなく　周成王の時周公の謗によ（り）て旅（に）
出るとて流罪周公ときて是よりして周公東へ旅にいたる
ことに二年を経て秋大なる雷電して風吹家をふきたふす大
木の根ぬけたり成王その時金縢の書を開て周公の前非をしる
是によりて周公の忠をしり心をあらためてそ事とさとり
給ひて周公の無実を知る事を周公としりてあらたに
給ひ雨風たちまち止りて民に家ことをとりかへしけれハ天の
としてまつりけり是ハこのたひ周公と三叔の
讒の事をおもひて旅によりてそのことを
成王のことをさとりて周公にあやまちをかくし
まりつゝ源氏も周公にたくらへて十二日まて
雨風といふなり

秘 二月一日上巳の祓の時より（雨）やまず　箋曰周公をひくも雨風敷
より帰京まてをいふなるへし

二月一日上巳ノ祓ヨリ至十二日不止

文王
武王
周公旦
管叔
蔡叔

周公旦事　尚書ノ周公ノ史記ニハ雷雨ノ説無之

△周公居東都二年天大雷電以風禾盡偃大木斯抜成王啓金縢書迎周公天乃反風禾盡起　本文頗畧

周公旦者周武弟也孝篤仁異於群子及武王即位旦常輔翼武王用事居多　封旦為魯公周公不就封留佐武王　世家ニ

武王克殷二年天下未集武王有疾不豫周公於是乃自以為質設三壇周公北面立戴璧秉圭以祀（東イ）神主以為贄告于大王王季文王　告ハ祝ノ辞也　史策祝策ハ周公所作之尚書也　曰惟爾元孫王發勤労阻疾若爾三王是有負子之責於天以旦代王發之身於是乃即三王而卜人皆曰吉周公喜開籥乃見書遇吉周公入賀武王曰王其无害周公藏其策金縢匱下藏之於匱緘之以金不欲人知誡守者勿敢言明日武王有瘳其後武王既崩元年庚寅崩太子誦代之是為成王　成王少在強葆之中周公恐天下聞武王崩而畔周周公乃践阼代成王摂行政當国管叔乃其群弟流言於国曰周公将不利於成王周公乃告太公望召公奭我之所以弗辟而摂行政者恐天下畔周無以告我先王大王王季文王三王之憂労天下久矣於今而后成武王発終成王少将以成周我所以為之若此於是卒相成王管蔡武庚等果率淮夷而反周公乃奉成王命興師東伐遂誅管叔殺武庚放蔡叔

紂弟叔鮮於管封弟叔度於蔡

武庚ハ殷紂子也禄父トモ云

成王長能聴政於是周公乃還政於成王臨朝周公之代成王治南面倍依　天子ノ負扆　依以朝諸侯及七年後還政成王北面就臣位匔匔如畏然初成王少時病周公乃自揃其蚤沈之河以祝於神曰王少未有識奸神命者乃旦也亦藏其策於府成王病有瘳乃成王用事人或譖周公周公奔楚成王発府見周公禱書乃泣反周公々々帰

誰周公奏既燔書時人欲言金縢之事或失其本末
乃云成王少時病周公禱河欲代王死藏祝策于府成王事人
讒周公々々奔楚成王發府見策乃迎周公
箋私云史記ニ雷雨ノ沙汰ナシ如何

尚書　第七　金縢篇也云

武王有疾周公作金縢為請命之書藏之於匱緘之以金不欲人聞

既克商二年王有疾弗豫也 不悦豫也 公乃自以為功 周公乃自以請命為己事 為三壇同墠 墠除地也 史乃冊祝曰惟爾元孫某遘厲虐疾若爾三王是有丕子之責于天以旦代某之身 公歸乃納冊于金縢之匱中王翌日乃瘳武王既喪管叔及其群弟乃流言於國曰 武王死周公摂政其弟管叔及蔡叔霍叔等放言於國以誣周公以惑成王 公將不利於孺子 孺子稚成王也 三叔以周公大聖有次立之勢遂生流言 周公乃告二公曰我之弗辟我無以告我先王 辟法也告召公太公言我不以法法三叔則我無以成周道告我先王

周公居東二年則罪人斯得 周公既告二公遂東征之二年之中罪人此得三監管叔蔡叔 于後公乃為詩以貽王名之曰鴟鴞 王亦未敢誚公 成王信流言而疑周公故周公既誅三監而作詩解所以宜誅之意以遺王王猶未悟故欲讓公而未敢 秋大熟未穫天大雷電以風 二年秋 禾盡偃大木斯拔邦人大恐王与大夫盡弁以啓金縢之書乃得周公所自以為功代武王之説 所藏請命冊書本也 二公及王乃問諸史与百執事對曰信噫公命我勿敢言 今言之則負于周公 王執書以泣曰其勿穆卜昔公勤勞王家惟予沖人弗及知 知言周公已勿童不及知周公之有日忠勤 今天動威以彰周公之徳 ... 王出郊天乃雨反風禾則盡起 郊以玉幣謝天即反 發雷風之威以明周公之徳ツ以起禾明郊之是 二公命邦人凡大木所偃盡起而築之歳則大熟

箋私云河海ハ周公居攝事不載記ニ詳有此説
私云河海ハ二月一日上巳ノ禊時風ノ吹出ス所尚書金縢篇
載タリ須磨ニテノ事ハ從河海本ニ依テ載ナルヲ可欲
三月一日ヨリナラヌマテノヨリ
日ニヨリテナリケリ
箋前後の義ハ二説あるし
さしきカさル

新
一義教のこゝろ 初 雷風にあひ給ふ中 いまた近江の源氏
にとゝまりし事
新
又の義清者おもし来るもとへはゝひたきをあつひてとゝ之
これハ公家役也とかく
心をかよハしまし
秘
尤近江の住人也みな平家の西国の落行あり〜ゆへき
いまたなる事なり 新 たのしなききにあれと
かくて都よりてん由 秘 西国落よろ源氏也とふかくゑそ
源氏の手をかひまゐらせれと北陸の人々も行そむきて源氏方
多くの四国の武者とも落行しとも
伊勢の目揚戸大将上洛の節を率ゐて右
私に義仲なりしと
人々の事一たひ帰るとて来り
秘
嘲内大臣伊勢をもたの由よくわかりて源氏の方につきたる
て母君よわひかつの平氏ありて来る
なからかれたる事とも城より上りて

新
伊勢公は遠流の所より都へ帰京をしてひかりの御代に
尤記る源氏ハ又こゝろの事にありて
源氏りとハいたりて 秘 人ゝとを恵ふる殊勝人
御義みなとゝなり 新 源氏の者まよひたり
秘
とまのたてまつり 新 同
私云中にハ源氏の者の義者も
一門のかたゝ賜も 源ハ殊勲
源平の者義経也 造言没をとふ
しかしめくるまゝり
秘 何
そのこゝろにてよ 雲のこゝろにけりて
只西風のころにおきてあらうゑかにかへりて西風動く
こゝもの状にかへれとて風は源氏の風十月の西風
新
状まくめるくとも割してあるへいと
風雨雷電ありしと
二条院よりて 秘 秘 世をとへなり
新 へ
あやしきさかなと 此御使義経をとふりかへつ
なり

蓑笠なとの様のもの一しほあはれなるへきこと
ころひなくに　箋河たのめりちかひて　箋　見よ
おかしきおもひなさへしも心もとなくそこはかとなく
あはれなるおもひしけなりし　抄世の名残なと思ふ人もかく
むつましきものゝその様なりしかはかなく対面なとすれ
和歌にて
うちよせて　箋霧雨　河岩日
はかなきは　箋世の夢のはかなく
浅ましくもとおもひなせは　抄世とうつりは父の河くて　世はうつり
文の詞のやうとえらみてかなし
つらきやうの事　むかしのやうにうちたえてたかの待をと
れ　はかなくいとあはれなるものからいとかなしさるを　箋寿命如浮雲
おかしきやうにあはれ　抄ならんことは
河のうきしたのなかにあらぬかにもあはれなるものかな
露の世のたゝかひのことにあはれなるもの
○箋　うき風やいとはかなきもの神うちぬれしかなしさもあはれ

箋　断雲の行く
相像の秋如風燈　抄わくれなる行く
吹きわたりしも　抄浅ましき年
いかにかなしき　も河かなしきおもひ
さえとられんとや
京のうちは南風　源の心あはれ
そのくさくし　抄は内使のゆかり
仁王会なとの　生陀天とうちあり
行　仁王会とは御会講演般若波羅蜜七難即滅七福即生万民
安楽帝王歓喜　日月失度星宿失度風早乾燥
仁王経持統天皇御宇始て本朝にて是を行ひ
三月般若仁王会例
抄　天暦六年三月廿七日癸未般若除時仁王会
日月失度廿八宿失度大火大旱大風国土漂没火風吹殺災火
箋　洞照空有職乗没国
一代一度仁王会　仁和廿十五除時

當日大極殿儀如御斎会　陰陽師或宗共之
辨少納言　外記史式部治部玄蕃東西廊謂之出居
朝座行香
上卿　已下着座如常　請不錯読経
三箇之法服料

中殿　南殿　大極殿　豊楽殿　武徳殿
朱雀門　羅城門　西院　内裏　春宮
太政官　外記廳　中務省　式部省　民部省
兵部省　大蔵省　宮内省　左京職　右京職
左近府　右近府　左衛門　右衛門　右馬寮
太宰府　東寺　西寺　延暦寺　以上式三ヶ所
南殿　中院　諸院諸宮ハ各七僧自余皆二僧
播磨国六十六座之善京中四十四座下諸寺百座
法也　経不定進之論釈法用　維那者所司沙汰
私曰河海ノ第と献をくつ思しき沙汰し

私下く名兎本之　西院四所ヲ式三ケ所之

如斯り歟しいて　京の使と為してとくせ給ふ也とおや

乳のためまてゝいつ時いつまて一ふかの御よい[illegible]
ほけなく源のあやかれなりけりとて　秘　是て此の由のあやかり
そとまていの雨　[illegible]
またいかでたまはれ　[illegible]
此のそら[illegible]　秘京ハ光院ニ云々
大雨雷電　日本紀曰　毀諸善人放天雷電　抄　全光明經
唐徳宗貞元四戊辰四月二日雷　[illegible]
長和二年十二月雷鳴氷降大如梅　已上河ノ義ヲ義我ヲ
云々り　秘河ふまたなるの[illegible]　仁寿二年六月雨水雷電
鼓[illegible]　義我
周[illegible]　河章[illegible]
[illegible]
その文の日　二条[illegible]
その[illegible]
いえ[illegible]
[illegible]

わかれてひさしくなりたる事也　秘　なにことも　みなよくなりにけり
ことつていひやる　注　須磨の人と云也　箋　須磨の人とも
箋　京の空なるへし　注　京の空と云良男へ
私箋　よみ侍りしてなくさめけり
かくれ
なにことのおもしろて　業平の心のうちをしなして
まこと心ち成りけるにて　秘　浪間よりみゆるこしまのはまひさし
いのちをはなにとたのみて　京へいひやるとて歌よみてやる
なかきまての命はいかにしても浪のあひ見ぬ心
うつのそしらく　箋　注　白幣　白幣は大ぬさの幣也
住吉の神ちかひはひと　箋　注　古語拾遺云筑紫箕雅橘
神住吉大明神これ也　日本紀云滌濯於潮上因以生神凡有九神
表筒男命中筒男命底筒男命三神鎮座于是則今住吉
明神者神功皇后十一年辛丑住吉明神顕御社中南社云遍照
注　奉納此神功皇后三年酒之河海
住吉明神守護して新羅征伐の時神の奉幣上之
私已上箋
む　住吉の明神は往来の舟をまもり給ふ故に神功皇后新羅をたいらけ
給ふ時此御神の御幣を明人に奉て御舟をまもらせ給ひしによりおほみき
風をまもり給ひしよりこのかた此御神を以て住吉明神
を神とあかめ奉り給ひし故に此の神威をおそれ申奉りて
なかし大和　箋　住吉は浪をまもり給ふ
かのくにゝおかれ　箋　此寺のへん
秘　経の中にはしらすまてのうしろは
又むかしのみかと　箋云　上の御なさけなくしてまかれはかゝるまても
行幸ましまして御神の今あらはれたまひし古歌へ　御製の歌
よみたまへる也　箋　此帝の心にいかにもおもひ申されたり
此の歌をうけてよみ給へると云
ことなく　心のうちにはよみてまかりしにて
さいこうのみかとの御よ　箋　此一段神に奉り御代今度の御行幸の御しるし
奏　古歌云吾在深窓人未識　此にては公家に貞観殿の前
一たりは源氏の君をこのみかとの御代に位についてはしめて世をしらせ給ふ

おほしいでられし人なれは陸奥紙おほかる人のなかより
ありさまなとうしくおほやけにも大臣の人とも河内の守にまかりて
こゝにありつるありさまなとかへすかへすおもひやるにはしらか
さしけりけるにものかなしきもまかりおはしまして
こゝにて
あはれなるまゝにまうてきかへりて
河 入春纔七日離家已二年 薛道衡
離家三四月落涙百千行万事皆如夢時々仰彼蒼 菅家
秘 大宰大弐卿ハ非王命不越境
公卿ハ王命よりまうて給ふなとゝもきこゆるにてはいらせたまふへき
かゝるところにものせられ 花 かくてなん源氏のおほせられしよし人の
さまことなりたまひてまうて給ふへくもあらぬこと
こゝに河のほとりに 須磨の浦にまゐりつく
くらへて河ふ 源の三郎にたくしつく
おほつかなくて 守 河原の左大臣といふ
うしろのかたにおほかりなん 河大弐殿 新撰朗詠集
秘 雑令 大弐のいとよりこととはるゝ 一説
彼大弐の大宰府にまかり給ふ
雲ハ墨のやうにて 河 杜甫 倚杖自欲見織順風定
雲黒色 杜詩 梅飛摩来 雲似墨 湖色青 水如大 柳子厚詩
李部王記 天慶元年十一月七日始 壊清涼殿
南之前ハ 周者年 雷震 改造也 其東行南廊及府拾出殿廊
国伎造之
もろこしの人にもかくこそあらめ
うしとおもひしかとも かくて給はらせ給ひてもこゝろ
おほせありて秘 雑令のとく おほせありけるを
案のそれとてわけて
秘 雑令の案のそれ 源氏の御もとへいとよりこゝろを 新门
うやうしなかめてたまへ こゝろをいひやるに まかりてまた御めを
まひなはけさ人さへものをわれよりさきにこゝろへ
えおもひしらぬにや 海士なとはなにとかいひ来つゝ近く
みなこゝろえたまへ
ものゝ風いとはおもしろし 秘 あはれなるものゝふ 新门

いとふかくしけりたるに　源のいふやう

河原院融のおとゝの家なり　塩竈のやうをうつして[illegible]

六条坊門の南万里小路の東八町なり[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

河原院融のおとゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さとりいへ[illegible]

[illegible]

[illegible]ほかにかゝる所も[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]文徳帝の[illegible]

[illegible]

私 延喜ニ猶意の弟と思ひまして落花悲の涙云なと飛ニ
あはれしまさるもの也へしそまてにつきておもひておもはれ
此事の文より知へし
いとしきこえ給へり　秘 源の身のうへの事
海よりいつくとこたのかり　そ 長恨歌ニ方士が海中尋ぬ事
ゐとこ深く落下に至泉といふ事
内裏に奏したる事　秘 源氏濁のみすかたへ　岩間
御上よりまかりけるて　源の袋申によみて
月のかほのみまもらるゝ　此下の句絶物て
杜子美が残月満屋梁猶疑照顔色　といふことに叶へり　岩間
そ 月のかほ御弟のおもひてあり
むかし比喩のこゝろ也　秘 海に入滞よのかりてと思ふしあはれに
源のこゝろ身の御事のうへにおもふにおもひみてかうかなしさに
見てまうす事もさ海しこゝろも心もさいなひあつき人のあはれ
よそそのかは　発のうちたち遂のかみしこれうるゝは文帝と業かみん
何しれとなりて

中しおきつ此心まとひ　袋の名おかしき様とてさこゆり此鹿なけれ
あはれしく秋しにて在遠近の事をまんれことさかり
みやこをしおきつしこともに　秘 秋かる歌の養とえろかてのへと岩間
秋ともおもひてとかくさかさとて秋へしもたかりつかり
みや
人二三人ぐみり　せかつかりみかりかいりとろ
わたしの浦よりさ見のうし秀句也　此播ニ前月宮之在花草毛
或云御堂関白出家以後世号御入道殿ことの可漂ともして出家
入道ときくる事し通俗しは因号入新発
十二
明石入道入りて播ニちかく　私自身此遠に参籠せる由聞し
私此この見のさしとつてかいふ所とうつれて明石の浦とかへるゝ
播ニいはかの由細しく人の名の名をまこし示し　秘報まさと儀意
なきしろくゝひへまや

源か申さて　秘 良清へ　岩間
うの心のさくはれて　秘 也まつくの知かへとに清文ト播ニ人なそり
し候へ　岩間
よろこふしもよいそのわらは　秘 今に清か明石の入道の女よんとうまとの事

入道中〻さみたまへとうしもくへ為君もてなしたてまつらんとて
めのとかくしてひとりしてと云也
君の御事なれは　此浦とまりて行てかへりし事也
源氏君の御わかれしをおもひて
給へるを　うらみ清らかなるいせの浦風の音もさこそはとみえ給ふとて
八幡のつかさの廿日　秘三月朔日巳の日のまゝに御はらへし給ふ日
さりし雨風のみ　孟子
十二日ありわたらせ給ふ　　秘夢の法華経　孟子
此うらによせよと　須磨の浦へあかしよせよと
いつかうち雨風いかゝうち行して後の人もいはゝす　秘　海の中の竜王の
須磨の浦へよせよと云はうちみていかなる事もいかにせむと思ひ給
さては海の竜王の雷電の御事にて入道の浦の御おもひかけ給
源の御夢にあらはれてまつりのよしの事あるへしとおもひなるへし
夢ありしてあかしへうつろ　秘明石の浦にて夢の御つけ
傅説が故事不可称計　史記殷本紀云帝武丁即位思
復興殷而未得其佐三年不言政事決定於冢宰以
観武丁夜夢得聖人名曰説以夢所見視群臣百吏皆非也於是
乃使百工営求之野得説於傅巌中武丁見之曰是也得而与之
語果聖人挙以為相殷国大治云武丁ハ高宗之此外云例
いまし給への日　その日のあしたとつけのおもしと云也
いかにしき風なりけり　秘明石の入道のよろこひまつりける
私おもふにかせとかくおもひの大風を云それとも君のおはしますなと
あかしのこれにかくしてゆめにしたかひてよせたまふ
此浦風よあかしにうつりたまふなりとおもふに御心ありて
神のさとし
さかえたまひて　君の御ゆめのさとしをかくて
もとよりしたまひしやうにて　秘　ここにてもあかしへうつり給ふ
しかしやといふなり
このうしろ給へと　河御おもひも思ひもよらぬ御告なとありたまふ
まことに源氏の御ゆめにて明石入道の心清き人なりとて
君よりも御心をかよはし　おもひしゆめはかなき夢の心をかよはし
夢のつけをかくして　秘御夢のさとしにもおもひよりて夢ならし
しかあひてあかしの浦にうつりゐたまふへきとおもひつ

よの人あんけつてこつにのしみもれそつのを
秘 世営よう毎ののとてもむつかとしいよし人あるつなといつくにもとをこゝろなすかくに
偽よの非のまとけよりはかんとて何人口をちとを色してせるのまことに非の
あまけもりてあらんとそれはよそなるらふといふ無義の事も申して見えとく
天見よりまちて 秘 天見よりまことの非色のあるまじきによるいそひ
おゝるれのなみつと見えにく
うつて毎の人の人なるよ むかつき毎にの常なる毎になる浅からうの
つねののなくなるに非のなもけれともいんはらるしてもへしいてん
やことも身のことさは偽なるよなるとせんあつめまゝのにゆ加くい
秘 世にもてふなきそこつらなんとく
まこ天の非のなもけらくしらぬんとをこれもとへらう
みえたうらうて世ものの人ならぬさくりて無義のなる
そのとく見るいか弁と同し立頭毛の人さまさなへ非のた
ありとれい頭しまして無かるかくは非の旨なんよ
己い親よかりけと秘 りか云 弁の義よりしこ
さらさ年もとつかんつ やかなつなそてにつれしつれ言

辛苦のつかひをもわれしく 弁口くらえつしい浅浮なるらつよ
手何みの声へこゝそとくし はし秘 秘 左伝にたつし立年齢まさなのさら
何事よりらひまそこまつ 弁口明之入人ぞいらしうけなるんく
人よきなとく人さえいなとく
うらまうとへこゝく はし秘
見い熱して人の言のよえてうかの頭なさらしてとこく之れなう
年のまさる之経てまさ人まろとは時の様かおえのいつまかは何とも
はゆ色まさうる人さんつく明之の人在し深武らうい齢まさらる人
つま道いとりかなのい色ことくらう人きとと
んひけくとみとく人ゆ
色りそ見くし云ぬし とたらいきこくみしてこう也く
色りそう人かいあつれたし人の見へてとまたしそのもの浅早下し
秘 てなまかはいでもまいらてとく
発 退といふ退体の退からわかれん上将ぬく人の気よむくらかくごぞかなく
出 孝子経文云々 け知進不知退周易之孝子経文云々
周易曰知進而不知退知存而不知亡知得而不知喪其唯聖人乎

先経曰不退則進不知所裁之道也
唐事察心決行可勅　唐書見下而不退謂之懐寵窃位固之甚
ならふいのちとこゝとわ　辛苦とはくるしきとく
ならのわたのみ残　秘人のみへきこ一巨のえとをこゝろ彼くるしきと
くるしとおもひわひくるしくとてもよろこてんくるしく
あはれことまをしはし　生仕なる残しくるしく
秋さしくつまのしもさきやのくるしく
ちくさとの法をとしへ　秘哀のゆつけ
源さりの給　源のわかしへふつり給へ人とよ仰し定めて
使ま法をすくとのにまかなり
ちらぬせうひま　秘源のこゝろすく
法たのの給へるまわかれ　秋歌へもとゝぬ経かまして源
みよ法のまにこしね玉哥しく芸とへそのかくとくとく
きまつさ給母残かん　問源よのくぬまつゝおとつて皆の
あふかとられしきこわかしの給ふ〇　河ノ川音ふく叶つり
廿川ふる玄しなり

かうつかしゝよ給ひひつしこまつり　秘八雲のこゝろつくく
八雲の使とさと　秋志不の尋よそひてまいまつして自身は逆
にまつりまつりとらん〇
まいの風　秘此風と　法逆よ無りしの時のこゝしくとえく
ざふ尾まよ行ししよつさ給の名　も描ノ国風古記云難波ご津は文
の法時代との釋哉論も法寺のこゝとの当残とて尋ありゆるかき
尋のわしくやささみかつことしーつらよ太かくは代ふかまらし
てあやをさしてすみと名付む身ゆ尋ゆり生して此会を彼し
此井のみのくとらひきなけ尋よのことして猶しまてつ時人の子
まよかり　すこよしの大会すさつてといつうえやへりとい
めいつまとろやとつ　今集時代のかうちうつりいくそめり一つ風
ちつしいひつる風古記のくうまりかつり
いつゝ哉たゝくかん也り　秘よのつ又ちのゝね此風といつつ
げ得ちうかれとしてそもとつしとつらしとやつさまつあまく
ちまのさなてにいつてんてくちり　秘八雲の千すとみのわさうく
人志まりかん也つめのさつん　秘たまよりへ人てとちつうりく

或抄前よ志集て志るすよゐしるべくさくまゆりたえん
やく御もよしゐつらくしくあはれなく　孟傾すること志あるましけん之摘
入道のふかし志ありけり
うしろうてもえく
海の深さよりも山のもしるきは　入道の宮中にも申しるもとめたまへ
なしとあやうくとも思ひの中にもなさけ申しきこゑ
けうとさもえへき　弄下從具のえく
花をさうもうたまいはつてし具をとはよすへきなり
つきさまの思ひ給　花よりかへのさ宮をいひはいらへ
後の世のまとさうそあはれにしのはくれ
すいしむかしつへきこの心のつまりすいひ　中清しもつき
三味をせさたひ　秘 言云經縛就解脫之　弄揺しのゑへ
秋の夜のつくとりたゝへ　秋の風のことくるを須く
のくりのよえひつひつきにいとのくへもら
いたらんけれあつ町つる　河 拾遺屏風に霧のかゝれとも
すゐすさて後のことつよ　忠見

秋ならぬつゐ縁はいつまてもよりくまてと怨あかゝ
此波のこらず　花明石の入道の宮をもてなされて此心
寂しう御車よそえてまつうれし　源の大海のさすらへ跡をもの縁之
かのよるすれふりそもしをれ　弄申は賢木時すあれは
こゝ全源氏にしかくかくよまれてはかなき
もしらうしの袖をくゝして　秘入道の方とあらかく　弄口
月日のめくりくるをよふんすへり　秘入道の文よくしるにいるうき
弄葉世しなわりなくていひ出しくらうそ門出也　秘
えもいえぬ入江の舟　此辰の夜まで入江なくる猶うさりたう　明石
の浦の入江をいかゞして
忘れくらんのはかりもしなへむとしうとしき　秘めつゐる翔く
月たつの御も申ゐ　秘ともまた紋かふう
あきのうらひなくしえんなる行してもあはれなるへきさあはれ
ゆきのうらひは源のおとゝしまれるこのまく下向なる人あはれ
このあたれはたなとゝふ
ゆふ旅の目にまかせて何下しよ　孟須磨は河よりしいとうゐるを囗

舎たく[illegible]
京の御つかひ 兵 京の御使いと御あり[illegible] 紫上の御文[illegible]
[illegible] 秘 [illegible]
[illegible]
[illegible] 秘 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
二条院のわかれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 秘 [illegible]
[illegible]

[illegible] 秘 紫上の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
源氏之[illegible]
[illegible] 秘 [illegible]
[illegible]
[illegible] 秘 [illegible]
[illegible] 秘 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 稔 ホコルナリ [illegible]
[illegible]

こなたまくらに夜をあかし　抄 夜をひとりあかしたまふにや
人ちかくさふらひもしつめてはゝかりて
いらへもしかねたまふ　かの入道など時々まいり
ものしたまふとかやうの御まとゐにもつかうまつる
ものしかるへく　源へしらすれいの
ほのかにきこえ　源のみなと　抄 弁乃
良清少将もとかく良清そのつかうまつるしもに 抄弁乃
うやこの人々　抄 紫上よし
いにしへのさまの　抄 川手よりのひとつ御紫上のおもかけ心地
にわかにむかしの中のきみかはしり給ひていたうさうらふ
13 須磨のうらに紫の所にてもかたみにおほえ給ふにいかに
弁 川守もいかに紫はいとも紫なにかえをとりて見えん
よの須磨の何ものにも妻子さへ臭をかけてなきにうつろひて
いとゝめてたきかなしさ須磨につゝくして父大君のなにかしの御
よさしたてまつるやうに我かいとしもふかうなり
なりしにかくにそのなかにて　かへすかへすなみたの

さまよひまつりて心をもやすかさ夜　明石上のあはれさも夜のやみにてふかき
けふも須磨にかへりてまたこなたへ源へおほしみたるゝ
父母に入道の心はおなしさまにおもひあつかひ
心もしらぬ人の思ひなしかしともおもふへし
心もおもひつゝ思ひて　源ては心へたてさまく
三月ばかりに入道　抄 一夜の礼もなさてやみぬへき
いとゝ出たつ人　抄 ひとつかとなん心のうち
六十にあまりける　入道のかしこくおもひつゝやまし
何こゝろひさしかりける　勅勘にてなとさる御ひさしき
何荘子　抄 うちとけひさしき御まへ　抄 みな御心
人の心ものうくおもひなりにいやしからすたかき人の
みちしさ荘子の性理也としらるゝといふ
さらになくおほしいれし　源ひとへにいはしかなとおもひてかた
いたさへにおほかたの人よりひさしきのてう御心さへ大臣
いにしへの人をもしつかに　とひてある御かたのみこのものまほし
めくらし

らしころせかたはらいたし　秘 源ハ御身をうけ給てうれしきよし
もらいてすこしまちかくも申さまほしく
かく思ふやうにハ源しも此浪のあはれにておもはしく
人とハ入道のことはなりかくのことくいとまほしからんやう
ねかひなとのやうにもしたてまつりてさふらふへし
おもひなき事ともなりとも　子てハ別ての事なく
けにかうしんなりしうち　秘 入道のかく源の心にかなふ所へ
まつる心をとは　さこそいはれて源とひくへきさまにハ
女君の御後のうへとのたまひしとかなしうちそへにて女ま候
またかくおもふ事をいはれたまへとさこそへしとおほしく
ゆくしこそ　秘 入道の女の心にて　来ては
なさけのちにかやうさまことそ　明石ハ京ちかき也とも又思ひなすに
よるのねくらへにさへこゝろあはれそよそ
見えさりしかは
男のゆかしさもなく　源の御心まかせにてよそにて御ふみを
なさけなるかなとてさふらひし　父母のなさけにかなひておもひしられ
ふかき御あはれかなしき事こそ中〳〵こゝろよ
らねとハさそ人の御心のうちにもさふらひしとこそ
聞ゆるかたにも京への　あはれなき事のうちに　秘 入道の方より消息ありて
涙ものこる　多緒なたゆのとかにあはれにおほしく
いひしよしさふらひしと　秘 此ハさはかりてく
あはれてこそおはせ　秘 源のわかれてもよのつきせぬさま
しのゆくさきと　秘 此ハ義の入道のかりそめのゆかりのすゝみ
なかりしかもおもはしてゆかしき源とかくていかにしく文
よ浪たつると何かおもひしなかつらのなみ〳〵し
京よりもうらみことさら　二条院なとにうちなかめて
いはれしなかにも御消息　こゝにこのしつかにいとしく
ことは御心もと御絶し
めのまへにうつゝもなき　須磨明石よりみちのくにとをき
何ゆへとかうなれはことに此浦のあはれにて何故浪へ此浦の何は
とをき海の上にて浪の中に須磨明石のうらのことにおもひ給へし
おもひ給ひ明石にまうてたまひしかともいはすなからり

浪路はるかにおもひやるらしまよふらし月のおもてをこゝろにて 彩雲
○源 河内にしるゝ行脚の前に浮にかくしけるに河内後といふ人しなむきて
校 是はあの兆かくれもし大さへのこゝろまどはしを見て題月
とさへのいふこゝろのよし
弁 河内に河内後を従へてこゝろは海の兆の郭に浪路をさよひ
いそぎおくく一跡ひとしの前によみし月のおもてをさしてかの長
引かむとき
や 此寺の人の事思ひしへ此おもふさへのことにかくと見ゆし
邸にもしれにゆかれよき人のこゝろの感ありしなんと
それの心ふねなし 源氏の御本音に後を見へ事とおもひあり
あけのみかくしく 校 大臣の中かく
浪ちよおもひて 飛陰シテ くしとも 私 飛に見く
ことの後きにもやうく 校 算高の流罪人し
(う) 毛詩云東山周公東征也周公東征三年而帰労士大夫美之故作
此詩く 五罪は答杖徒流死也としかれ從三年と云ものなり
年 流移の人と云哉ありく海路又三千里ありく中にまさりし事 獄令の文
むも ゆかるかとそれは三千里也残けれて又まつりて遠流のくく
令書の獄令云凡流移人至配所云哉以後聴仕即本犯不應流
而特配流者三哉以後聴仕令案流移の人といふ流罪をかける
人とを云也六三年の後は公役にまかる事はつ残ゆるさるゝ流罪の
科に及たらう人のていかに配流されたるは三年の後許さ
るゝ残ゆるさく今源氏の君はゆくはしさう三年して源
まかれゆく久しうには三年まで二年をも出仕をさへ心放に
三年とすまこさてしとそ以下かく故に三ヲわりて常赦と云八虎
罪を源とりく大赦と云は常赦と云大赦大赦と云
是は八虎以下の大赦うしのそのまかまかそこ悪しゆかるくと
云是は人を此当はるさとのまゝ別勅にまかりて源氏
の君二年と色をと云てま赦免ありおもてはさも心ある常の
昨それひとく云に其のかへし
河海に流三年の大をとりきにおやまかく文刑の中に流罪と
云は流に奴く名をかうこみして世の流にふとてく流刑なり

ならひ流人の中に一年より三年まて徒にはなかく

（秘）徒一年以上至三年なとしるしたる

律云名例律云凡除名者官位勲位悉除課役従本色六

年之後聴叙依出身法免官者三載之後降先位二等叙名律註云除名

者官爵悉除既除故課役従本色免官者免所居官愚案

只今源氏は除名ともまた免官ともさたまらてまたなにとも

人〳〵されは先官のまゝとも又免官とも見えてさた〳〵とも

みえされとも先はしるされて今はいつれも律の文にあたらす

私云秘抄の奥にも此事のせたる今は此事をしるさすなとあるにや

（秘）後漢書董卓傳董卓死後其将牛輔既敗衆無所依欲各散

去李傕等恐乃先遣使詣長安求乞赦免王允以為一歳不可再

赦不許之　私云毛詩下の句被流ける今も奥に加之

きさきかたのいてかの流人　私云此大后は呂后にして朱雀を恵

帝となしけるか恵帝は仁弱にして虫にくしいへるにて此朱雀は

仁あつくおはしましたれは此后の政事も漢呂后のまゝに

政事も悉く恵帝の心のやうにもなりなん朱

薩滝花に似たり

　　　朱雀の御門大后の御心をそれてゆるしなく

ならひなくもかゝりつく

　　　花もちらし花の露の御事とさく

わかしよるへいの秋は

　　　源の御心の中と御とかの御心をそれ

むかしのかたゝまかけりは

ゆくさへかてかけなり

　　　（秘）お花てふうてまかくせうとく

こちまて猶より

　　　（秘）

はらしく

　　　此女ちより

　　　御かたのかく

ちらむしきさきの

（秘）一流四千里のへなかのくにまてはたちにまたなくなりて

　　　はらひて

人をもみしかとおもひけされさん（秘）自然御流しこしたかしてけなく

　　　私にかいまみ給ふかくのこはおほしいれなき身かる

とかしよのなよみすかたくへし

およひなきさんをつるおやからに（秘）父母のなれ流し身のへなきと

　　　ゆふとかたくかへつく

まここそなてもの涙をしる月　せきまするらんにてもかりいなるく

こゝ世よこのみかたかりなるをとかくこそえらんといふ文人のおもふこゝろなる猶さし

秘 世のうきにしも云ふ事は二條の相より世のうきいたくなしいつくし
世中はさまてもなくさらなるさて思へは見えぬ後
さきらのりたてゝは親のこの世にもなくくさとく
私世ことなりとは約束とはいかなる物のゆへくることとも
東の御ことしかはいかに人はいかに
あひおもふのく 弄 人のいはんことをのみ
私ことにまことにこゝろのくをさしいつかんと思ひけり 秘口
そのしいるに 源の宰相の内大臣かよひけるをしとおもひしとの心也
おもての中にうちあかりぬ 見まうく源中納言かよひてありきとも思ひよりし
おやこいらいらいつるく月 此比源中納言の御かよひはいかならん
かとしらぬひかたとえらつおもへりえらにおもしたるもありけるおほしけれは心をのみなん
おもひいける源のとくおもへにしたかひつるにえらんで約束のつよ
まんしねこもかくと私そこくは悦てそこそこ心にさせ思ひて
いけるもかんと思ふ心をもかくまにすゑにひとつゝあか
思ひはしけの後の心よ 源は浅からしかし給へ入道は宮にましまし

志のひてくる給ひしこの日なかし 入道の宮けしからぬとらへ給ふ
御心の中こそはこゝろしらぬも成 かへるかへるの御かたは思ひもよらぬ事なり成
入道は今われしもまれさせ給へとかけのつき
てらしもおもへるもの 中宮とは春宮をも後にといへり 以下皆同
弄 出家の後ともなくなりて中宮より源氏の御方をもけしからぬとかやの事をさとりける也
十二月の月のく 兵 八月十日かく 秘口
河 何となくあてにそのもの 人のいかなるにもよろしくしけれ 侍りけり
河 河のさえのかき月を世を後にしてかくこんなるもうちよことありや 兵口 秘口
弄 かのならいかにも八方菩薩の新都の事にも又憶良なとの事なり悦ひしたかひて
いかにてまかせりつのおもしろきかく
思ひはもとこの心後にて 秘 おもしろくしてこそおかしけれ
私もとことはこの心をのみとけしてなし
東宮もして 秘 我のもとのかへり給ひし後なし
宮をしかしてしはかりて 河 花鳥の御心のかけつゝ思ひの後也
ちかふとらつ見まほしく 河 思ひ出 同
秘 ちかさらつゆくりにはかなく思ひもの入道の御事にもかゝる心も月影 秘口

安 二千里外故人心とは白氏文集十五の詩也
恋しき人を思ひやる心也　　抄 嵯峨にて
すゝむるといふ事也　　抄 すまへうつりてこそ見給へ　秘
京へはまたゆきやらぬ心にて旧都を云なりけるをいふ
よろこびあへる事を云也
秋の夜の月は二十五日まで也此故に月はこよひの事を云
二十五日の月は翌日の月也きよからぬなりと見て近よるまゝ
秘 須磨へおもむく時は浦の物語よりもかく見奉るなり
やすく源氏の君はそれをまつりことに出給へる事をしたまふとも
かほりの余情ある事をたのむ
十五夜に　　秘 源氏の君ほのかに
秋の事　　秘 君のちに思ひまうけてかくあるらん
いひかける所　　ならひ知れる事をかく
松風はまことにあはれなりける事ならん　　秘 入道の浦の尼のおもひさまを述
海のほとりは心ありける
さていふ事也
源氏の君の心をさきにもうけて見るなり 同紀

さてよみ給ふの後にて　　秘 女なりの様を後よりはたちまちに
おもしろき事なり
二条院をおもひて　　秘 入道の娘ことに同じ心にて
ひとりかく思しけるなり　　おもしろき上の方に
月の色をあはれにいふ所にいふ　　河内本
にほひの色をおもひやりかへて、なを秋の夜の事也
定家卿の考証は物語の事はかへりてあはれにかはる
入道源氏の御身の上にかゝる事のあはれなる
との事にて源氏の君かはいかにもあはれなる
かゝる所にをかしと思ひ給ふこそいとあはれなるかな
いふ事なりと有て此色にかはりて見えけり
なり事の有りて心ならぬ事を見し事也
抄 此かたは源氏の君の心を定家卿のおもひやりて
此須磨の浦にて今夜源氏の君の心をおもひやりけり
おもひけること人々にかたりつゝかくあるへき事を云
詠ありの風情をとゝめておく
　　　　　　　　　　　　　　　　安口

うら風をもしひ、、秘 源く
かしこまりにかんてさてまつりしと 秘 明石上の人さかりさきさ顔く
ねられけうしらく 明石上のかれてまくちりはてさましと
こふよりくわまでねられけうしとてうちしもきみ十日頃八月よく
こよひのう人めつかうれ 秘 源の御おもひ給へ侍りなうと
御なくとく思へと源の御言ふくなよう浦くはまとおさき波
かうら宮となりしをそのへそとええんとく
いとうらやはまさるる 秘 明石上の浦まのなれ十四日ころとも家男
たえていふに浦づけやはまし十日かふ御文おはお源く
かきけりさりきとえんと 秘 源のへなり
心もとなくよまき寝 秘 源の御かり
ことにその思ひ志んへてよ 秘 弟子地く 明石此上てもまた
ちかくもの心我うち為へるく
ちり九条了のゆもまたけしのもも 秘 明石上奥さ宮へ行けり
かう我源の気もひとへ語しえてうらけ筆なとにえれおう
つるにちえへし 弄门

六位宿世おもしろうてと我 紅 此世経へんの勘とにせしと我流行給之
秘 事の字と陪よそへたり宿世しかうて宿の御事流布し給ふ 弄門
○源 ひ門と我うらやかくをむ人ーとかしさ世の事なるくしさしかて
もりふ人ーとくうもり今年の夏の御つなかり明上の事人多しもかて
秘 いさむ為しとく源氏の身とまさとよ夏の風しなたくへし
源の詞く 源此身と忠路を夏中のてししとふくて流行今先
夏のそしらうかり身のもへてしたなくさ毎へしとく明石上のうらしと
きなさ白とてこし見んふう言ありり 河河弄 明く
○左明石上 わ自ねまたに風も一しきさつて人てかへいはまと我夏とことさてもそう世
そと秘身す夏中くいつも我思ともしこうさう人とく明石の返事へ
いきのこえやもそ和 言うことさ白へ心を御きこ清ましさうへとさく
こまんかなりて 秘今夜源の御沙おもえさよくとて大宮の御ト
こしひふう侍さらへし
ちりをはりさうしのかしまのへく 秘女とこし 小人たうとよん自 河弄
たかくもたてらしし源くみさ白へり せ明石上のことうも次
ならとまうつうとさの人源氏の気のへまつつ我からうなりくさる

てもさらに浦のあまのあさからぬ心しつくしたつるなきさしもあるまて
わりなく源氏の君に心ありくもや給ひしところ給へつるさまして
たちなれぬなとあるへく
ちかくてみることはいとくるしきわさなれ　秘　心ありくおもしろう給ふなと見え
花　ところく世渡なともしるき所とも見ゆるしかしていま一日二日へたてつゝ
さてのちはいとかうしていなかへともあまりさまさりのけしきなとにて出
ことはおほかたかくぬりかへし　さ下の紙になんかくかう
人さへいとわりなくにほひ出て　にほひ出てといふはやさしくてまゐる
弄　給ふさまひとしと思ふといふ御心
秘　うちかへしとたのよのほか時すこしもたとへなき秘りや
河海源氏物語やうなることに思ひたまよりひとつきて入道
ありのなきさくて一人しておもきなかへ　秘　をけかへしなへ
私ひさ源氏やこのよのことはかりもこゝろうくこゝろし
ことさへ人もなれぬとかくてかへりさまちしてかくへし　給に
ひとつことあるまゝにはかなきことをうちいへるとふ
やうなるもの人のかなしき

からあそひなりといふちかきさまに　秘　源の人かへくあそひとなれいちかくはしく
私須磨の浦人済居なりてこのかたに又は浦へうつりおほく
又入道の人々もちかくをかしうかなりてみえはなり
はかなきのちのよのさまなる　若子地く宮もに浅しぬをかしき
おほやうやくかえたちの波さうちもなかへしときく
はかなきいはしきをくましきも　秘　かくふ人の秋の夜なれや
思　そ源氏か年いて見ゆる源かへいて見えし物から
なりしともえひとそぬむかうれかしき人うし秋の夜なれは
私前よ入道よ源のかへりけ給ひつゝひそうに
見えう源氏もさてもなやつもしくもかりひわうのうちさし給
浦人にも思ひくそのふかいわ　秘　此物は大かたいのふきえへりかなへて
海の人たまいたへのひかふさく
わいたきこれへのわきまふるや　秘　若子地く
京の方もおもひおそく都にかへりひおなうなるへく
うらみもなくて　帝よりの御道もあるへく御使なとまゐりてかへされ
ひ孫なとは　宮女のをしこのきとも思ひにくゝ浅きは世中かへさまふ

祈申させ給ふとも心やましく思すらむ　私　式部卿の姫君
なとハ後の代使なとして源の方へしたしく見ハかり時の孫なる文
付文君ひとつも哀なる事ハみなこそおもふと覚ハ御返事
なるへく
かくて後ハ　此後ハ源の御かく思ひ定めしをはしまさく
かくれさせ給ふ　後のたのミよりもたのミ給ふへく
秘　たゝたる人まてもおもひなけかし不知人ハ
物ひとつ物のあわれのこと也
人のおもひひとつおもひ外世に又京の方の御事
秘　京のかたくとはつらく源のかたへおほゆる給ふ
かくしつらつれて　私　一品宮の御事
流行の身となりぬ給ひまて京のかたへおもひさる
なかへ人のおもひやらるゝなとしてからむなとハ若紫の
宿へかれらにもとおもハれにおもひそめつる事ハ侍
おもふへく
ちまとれとも　秘　思ひのかすに身をなくつらくも
かくおほへなるへし　おほえ入道十四にて思のかなしさ事をうちやりて
ましてなにおもふ母君のいとしくなりて物のあハれを
ましてかれらの思ふもそこにおもふもことにさ給ひしなと
ましくかゝなれ給ふ　秘　入道ハ源の中なと紫上の事のことハ侍
おもひやらる　私　紫上はいま此女御の事を源のかたへ給へる人時
のかたひとつしの蓮の上の御ひとつにてなりける事也
このたひかゝさいはゝ物ゆへにとなりにしやむとなる
源氏の御事也
二条の院の　紫の
私こなたにも紫上ハかなしく人の心にくゝおもへる人ハ源
へ二条院の紫の上をさし源の御心に見たまふやうにて
のかたとなく
かく心のかたハ　若菜上
秘　紫上嫉妬のことハ人にもかくし
わかれたる事とおもひとは　見ハ若くてかなしき思ひ不和のなる
紫上根源なれはかく思へはかくさまハかくて源氏物之
人なれはかくなりて明石上はうらうかなしき人文にかく
おしよりていまやかはるへし　秘　文の詞也
見ハ紫上へ明石の方よりも給ふの詞也

これかれしんしんかなしふなり　弄　花は交の栄此細よいふて教へての花

ぬこともなく

又何中しく物ともなきも　弄　又何中しく物ともなしと言ふ事は明石上

おほかたの世のなかのしけきことはかなく　秘抄

ちかひしこともし　秘　げに別れ河よ同し　秘　指意とよみて浦ならすして

河　こともなくしと結びて後の世にてもことの上は神かけてとなり

御ともまつりたてまつる　秘　此句亦にあへなきなく　弄抄

源清　○出かけくらしまいつて　清抄　清の見へのあはれなきに付てもこゝろもとなく

弄　出かけくらしいつの御宮はゆるよしは弟をくりして細なかれ

かりてよろこひかほなり　明石上のことく

秘　何ことにたとふへくもなし云何とよみてみえぬへし友只つ

つきせぬあはれとこそおもへのことし

なるかなくかりもけるよ　源のこゝろはうちむかひて云ふ

御よ細なと深しくみぬるまゝにはなよとて此結之

思ひの給ひつる御夢の事　弄　花は二条院の御方の御事

秘　花より紫上の文の御返し云ふしこは書てたとへ今御方事も給

されと此浦までのいかへつのこともなしとおほえいまさうしくく

私　花は紫上也文乃おもむきは明石上の事とさかり細なくく

○紫上　うら物かなしかりけんかはへしとまつりの陰はあはれしくそのとし

秘　弄　あはれなることはまふのほとおもひやるへく

弄　まつりの浪のこちいふは東の松山をわかれたしんもなくて

浪こえたといふはつらうくなくしおりあらは人々の心もなきと

云文浦をしまうるは雲ゐ此おもきにかなひつくらるには浦

のちかきかんしうに読り

私　末は松山波もこえなん此哥を引て見え又花も細かなる文

宮へのむけてあるくして我もおもひわくもいくらくの事なれて

と満なくしておもひきたりにしもなくいへ

たいらかなることをこそ　紫上の御返し　うらやましき御事を

抄を云く

こともなくまうてり　源の紫上の此返しのことともなといふとこそ云ぞ

なさつきへしう志のおもひの旅形もし給ふ御　秘　の君は紫上の御

の君のこれをあはれとおもひて明石上の事もなくして流なとこそ

女おりゐしもしらぬ事よ　秘　今は源にいま源の
一つなく語給はんも大事なり　へきことは語給はし給ふ
かんしなきをいへ　秘　元服の後内大臣の時は源氏を後見に
へ給へとのふかきことなりしかは、されはこそ内をもとゝ
ちかく侍るはへきことの心へはたなき御事なりけるへくさまを
河海　おほしくはへたまつりし御代にそはしまさるへとも大事にはおはしまさすや
河東乃なりけるにや　帝の上は父母よりも年の先さへあるへし
人なく　秘　人並く
たゝそこはかとなくて　よろつりて御なく事は本にその事は
もかゝる事を中をさしそへく
そしらふ事なくて　尾じに宮の御事の申所
とやかく侍なく出家の御ことなるを源にさせさせ申へく
なるなりよ　源より御こと御いたきなく
わくもとより月ひさしく侍へて　源の心ある
しへとなる事の　秘　帝とかく
秘　源の帝ニ成給て御わかれし　是は源氏にいかむ時の源

く先帝も代の程に此源の御子なりと思ふとのたまひ
こゝろかなしくて源はさりとて明石のへもおほしめさらく
しさせ給はしまうさせ申　秘　帝にはへ見えさせ給ひとて先給はへく
世の人もなる所へも宮にも帝は此事をうけたまはらせ給ひし先を
此事はへさるとも此事給合にのたまふ事は冷泉にいらせ給へく
帝上の御こゝろへの御事を見給ひけりとの給ひ時　此給へとゝかく
帝上の位ゆるさせ給へきよしをさしつかはせ給ふ事にて給
今の時の御ありさまに源氏に一親王にてよりは帝の御位ははやく
ふかくおもはせ給ひて此義を思すまじう給ひし給てかくいそかせ給ふ
とはこん人のわかれなりよりてをはさせ給ふとく帝はあさの
成へし
いまくふはそのよかりけんたくりにかへ給ふ　秘　いま帝にて給とはかりて
おほきこの中に　秘　りんのへのあるへし
いみしく人をこゝろさしさえ　秘　此御事いかなるへき年のいろいろ給ひてこの事は
比ことに　秘　若御にいかなることにて源にて帝との
御つゝましかれ文人のかくれひとつならすとあるかたのへし

とふしくりぬへ　源氏廿七帖よなりぬるよ

源氏京極中将といひし三位中将の昔のやうに廿七八くらゐ此年源氏三十九

うちはなれてかくのみ　河内本　うとし此松のゆく

なきしるひかりこそ　常代（とこなつ）皇子（みこ）

右大臣御女乃 髭黒之父　兼香殿女御は髭黒の妹之　松常代は朱雀院の御子は源氏今上とうくう

右大臣 今とてし給ひ父 明石右大臣とも　髭黒太政大臣

兼香殿女御　朱雀院女御今上御母

右大臣のむすめ　秘　髭黒の太臣の父之

兼香殿の女御は髭黒の妹之

ためしなきこひまれ　弁　秘　源氏の今上とも　此巻二十一

ちかよるいは　河内本　冷泉院　秘門

ゆるされぬかくきこえたる　源の御ためにかたく

こそうらの店に御たちたりかまた　大臣の松ひさかたへとまり

なかしまか　光る太臣の御ゆるしともとうちてかりぬく

はかしくそのさまにしたかひ　光るきみをかなしとのにくさんと

志むつ藤さきもとも給ふを　光る御かたへのゆかりをなく

いとしきは此はしことにて

よ給ふしおきしまた此月のきえきさへ又此はかたそ

なきかさやうなるもの　ゆへあかしと此悩みある志らに

いとしきは此はしきのきしと志らぬに朱雀は此国

かよふしうちしをきて此比又おもそもやうに

七月廿八日（ニツキハツカアマリ）　源氏京乃うち

又うれしく　秘　前よゆるされ給ふこと給ん事えなく

かさねくことをなう

ほゐの事を　秘　はかなるよしとなりしく

よれつ給たまう　秘　源の心中すこしはかなく源京をみてあ

ほいなう浮世なれのかなひいうしもなくに

まえうたまへは　うへかうへにいうをそれにとくて

御よ源京のくさとまり　ありはきもとくは浦の大将

かくもといそかくしとく　源の心中かなり

入道さらぬくさまく　しくらきはけるれとに此道くとさう
深からんと思ひ頼くされと源氏しきりくに仕流の事
也おもふやうに入道は思ひをとくく
うれしきよう思ひなり　源氏ちかきこと名残おしく覚ゆる
六月はかりより心くるしけ　弁　明石上懐妊の事　秘口
秘弁口　前に源氏の帰洛のことありとしるへきらんかし
秋
おやみつになりゆくや
あやしう抱きつくへき　源氏きこえさせけるさんかへりし
秘　一生涯抱きしひのたくみれとく
又今はやみしきすのおもひ思ひ宮にへし覚ゆる
女はさしもいひたれ　此流さしてかたき抱くなとう
いにしへよ又此源氏のしのひかれとも一説けすひかきぬ
いとこしくなりつや　草子地
はのかにうち見んかうさなん　私　我くわ給ひし時に
にけさて源氏なくらるのしき　此所に文をわれとく
さこるもとなれ人めもいへすまかなりち

さらぬ女人ともも　此旅居のわひしさにひたりしくさく
いかにしの入道源氏くまつく　弁　いふにそれもさて七月よりさき
弁　七月のころにや　所詮六月とこそ此卿に帰らんあれなれかり
秘　六月の事にとも云り　初秋也
秘　七月に帰らんとある京此年ことともなり　初秋のさまに
私弁秘等の義は七月のはしめに　八月よりも云ふと云々
七月廿余日に帰るへき宣旨の度ありと思ふ也さる事にしも　相八月
よ源氏とかく思ふ涙の道く思ふ所の事は八月中おもふ
なとやんはかり　秘　源のみく
さ海くよ思ひしこられ成　源の所にあるをさ給ふよ
数ししる程のおもひさこ成くこしやしうつかうこ秘よれ
かのこゆかくかくとく
かえれかくよ　秘　雅きんたとく
月に従ひ人よ　秘　明石上のおもひ思ひ給ひしよう
さ浪わやかなり　見にゆきたつ人この源と事となく月
浦にさ程残くしまの別しらて見わさうしなむ此浦にう

さかりし世の中にはかゝはまゝにとはしさをえんへあらめ
やりくとこれあるゝにつく　秘須清もうらやまるゝしるへく
少納言あらへしく〳〵
花 少納言は須磨清もりの源は少納言と見えしのくしのよりあんなり
弄 かやうの御住居しくさこめ見おへるたくは見えいつ成は須磨
すくなかりは　秘 さは須磨もくらきは心ひつらしとあおしく
わさていふ　秘 おさけりく〳〵
花 源氏君明後日須磨京あるへきこと成云
まいは代物りをいふかもめなさく〳〵　おのゝ見えひとつの弱蔵あ
本々おもはしくとい在りく〳〵御の京ならて思ひ給
そんなうち面く
よしく〳〵志りそこそうら〳〵　明石上のさめ也
さるへきうちまいらく　秘 京へひとへて之と見えとく
清やりのく　秘 京へひとへ之といふ彼是なりさかりみつく
身しうそうりくそうらいかはいかく　秘 世をつらく源の物ともく給ふ
此の後のうちへ〳〵りおく〳〵ても身上あつてにさいとも物へさとへ

めてゝ見おもしきこ 秘身此程ならぬ見よ　秘 年すぎ給ふにてもたゝ見え
明石上の心もうち付て身の程のなさをかくとあうさをしくおもへり
浦の声秋の風なと　秘 浦の声も秋風もなかりたゝ所柄も
見かれしおもなり　秘 此浦もかうはとはことさの秋の気色をこめく
うらはたゝ此ちもよしおもひあらうものなりとはつく　弄
紫式部清おもくへく集かなさ古今の歌と縁とたちしへし気色
源 このたひは立別るともよりし国の煙はおなしかたにたなひかん
秘 はなるゝはおもしくよそにひしくなさとく
私 京へのほらんと給ふてまいらすおもむきもおもふく
源人の ○人はきえくわさのあしきれはいまひとさ彼にきこし
弄 うらさつらてとはおもひかく　すひはまたとへ
秘 かくしあらやく〳〵　私いまは人ひわさ彼そうていつうは身の程
此およそみすくたりひとりうらも
あらさにうらうきて　弄 明石上の歌を返しこさ身く
いさうしきさて　花 もとく明石上の歌く
清かまゆしうり給ふ　明石上此その歌も源の御もし　秘 さかりめく

おもふらんの心よりもといふなり　秘　云と琴よく分るゝ義也
京よりもえうもなくしほ〳〵しき程
源出京の時に琴を給ふ事もしほ〳〵しさ又もあり
入道いへるやうに　秘　明石にてとゞめしなり
入道源の御琴の事よりも思さるゝ事此琴をとゞめの
ゆへなし〳〵明石にとゞめおかれし
いかにもいかに源さへ　明石上の源の琴をみてもよりおかさるゝ
思ひ定めりけりつまつれ〳〵とかく
入道これ此ことの秘成
私此これ又ちがひなし　秘　広陵の箏は唐付と云く源の不上
明石のことはりひとつなく
いまやうしう　先より広陵の箏の秘事也　源なる不に
思ひとさ波なり
こまかにもちまく　明石上のことの秘成也
秘事と秘事　秘　一つとらえく
秘事ごとは今よりいかなりとも〳〵ゆへなきしかや
このたびはたち　秘　源此箏なやみける　先尺も成而く
なにまし多　かくゆゝしきおほ(せ)なのへいかゝ
このうちけくひかさく
くや高し　源の人すぐ
心のうちゆゝしきの　此のおもふらめぬ琴りかさく
琴ハまさにおぼえし　此の文をとものまふ
言うえことよりくとさかなく
○なほざりにたのめおくめる一ことを尽きせぬねにやかけてしのばん
一こととは琴によせて分ちくはしきことを秘事ともいふなりなる
のたまふ也
語しと成琴よそへつゝ　秘　一音て琴によせて分りくしかるにハみることを
今をうきまことに此のことゝ思ふへ成ぬる事と也
ふことありしかもそこゝとおもふ　是琴人の事の琴
見まてのこの云とゆとさしてはいふ事を頼むく
○あふまてのかたみに契る中のをのしらへはことにかはらさらなん
中のをとは調子の緒也
撥のかよふ絃也

花 中の君は六条院にての絵合にや 桐壺の后なるへし

この巻たつねらるへし 兵部卿宮とあるへし 秘口

ことに近きて絵合にてもちゐられ給ふ 絵かきの絶

まさしき事たつねらるへしとも定まらんと云々

これも所の物語のかたち 明石上の事也

そしたまふわかつき 源氏の日記

人まなくしるく 人のしるしなく 人ドヽ 人離く

源 うらをとこしらへも中浦にの名物にて出り出るなれ

弄 うらなれとらて物京の人なと知られ

花散里也 うち色は○高やしのまてうに紀淀也へてやみとあへ給ひし

秘 守也へ給ふ〜もを給ひとてへて紀淀のこゝに給へ

とらく人とくらみたりけり

兵 みたともとん見て云々よわりつゝや花宮なる人らんとそ

秘 花宮なるらんといふ宮御よく見えて後に

後のにくのにありけるよくなりけなしよらふたり

私は秘の儀をなすへし

うらむらきまし給ふと

兵 明石上の事とあるへしと後に

此ほかのうらに思ひたまへなん

思ひたまへて給ふと 源のはては見あはせし思ひあへ候はとも

心志て見えしとも 弄 源氏の女めてよ名物を催しさせと心にも

今のうち年程たくしとるとしたゝ名物をしくそひなかりし

人のならのしかたのしきくとなして出りたるなり

秘 明石上のへ名物をもしてあるへ御事とそらくらへしはらくらはへ

とはりの名物をも おしこゝにかくせすいて

うしきこらたまなりにわらん 秘 明石上の後にみへくし云々

なくうは清めらんなすゝて 秘 いひあへりことしも此ほかの

うまつりなむ 文字をさの事もこゝに物語のかたとてなんといふことを

さらにいへるなる地なり

八道のこのふの所りけ 浮舟京の白の事

をひのこうそくへ 供奉の人々わかしきしの所へ入るの

ちなしれらうにもへ

はなちひきて、源の氏紫式部なり。
御方ひいはるゝ 河家持あるしに給へ
人りのはさらくに 河拾遺 絶鶯 りかれ
桜みまことに
○まは花り さらゝ こゝ さん ひたしれとをしやんのしくさね
抄 さてもしハ花のまゝ こゝ 花 明星の前く ここ
抄 さかのことまりいたうてれなとさハとけしとなるに 増 遠
武井の御法語しこもあまたへとまたなとさハとけぬもに 増 遠
はらんしはかなく はなくに 花ひ給ふさは
○蓑
嵯峨院御覧のこと 花ひは御前されとくさり
○さるんとくらへのくわふよの月次なと人中の御さ哉
抄 ぬさいつるんりとしやをか
兵 ぬさい人くらへんれりてか花さんとなりさて はつ人そえ
私 源氏物語いとをしいひて人 形見なんかは いらく 色さ
ら給さ人しとくたりいわの事 明星の前く
かくしわたとこし 抄 今つ花のもすりよさらくへかなく
花の男さりまこることもいと 昔 此物語の男はまさをまことならし 中にそかく

ことけりさくしとしやとなくまつくく
まはいまお御人 今一こゝもく 哀よけく思ひそ
抄 昔 遠世の男覚とも[…] 私 相宿後の男わか 遠りて
まつるかく
○死
ひとはつきよ 作給ふて月ハ月カイナカラトアリ
世徒かんよくうし去りもしの男とふりて作るさらくと見ようた宝な
世 よ彼物ハ世といふ人彼物よさへくるく はさしとくうよ 後
抄 彼御方とん菩提をうくるよ 哀さく
此君んたくかいそくさ事 又所とさん云々ゝく
私さりしやかにこうく人見 奉
人の後ともに雨ひぬるて 兵 人のなしさ我の手を人御より
河 かの道ても道のは花よ行くしとあつとをけれとしとや
人の歌の人とは奥より御ゆかよる 子彼井まかつ後より出ひぬ
花上の御とは我井よしく家の人来りわり
私人の年に まゝ つゝ との花道のしろうそれ
君此もの人ひやかくらにまとしととかく

○源

まれしくさき後おもて　秘　むかしのちの世のすゝめにく
れむかしのうへて見えかし　恐ゝ五文字にむかし何となりて
源の玉鬘之上とゝく前よんの風ゆくとゝってもけすゆかし
いらゝそのゝとおもわれて　源の今日かり
とてらゝしらゝわとゝて　秘　源へてへこゝさまて
なり猶とていまりむかしのわらくちふ浅さゝ之
かりひそてゝらん　秘　源の詞く　懐妊のさく
いさいこゝとて見なる後し　秘　后のゝく新へしかふめとさとく
そくゝのととしも　秘　明石上浅后とくいしてへて見えゝへし此とこゝら
又ゝそゝりとて見ゑへこゝるしゝてしとく
あき里し　君のなきれよおもくら共やうち娘ゆらくとゝられぬ杖
らうに幸称し
たゝのゝひ　源のてうまへく
いとゝとゝゆおもへし　源の后の母後かんて入道のゝこもくなり給ふ夜極之
まろかふ
けましくらのくら　明石上かゝり

男のゝ兄をとりしてまへく　明石上は男の猶のおうへあなと桜中の候之
つゝ見えをさてゆかしとゆらへたて見えつゝ　源の心に涌泉に明石
とせとかしおゆんのゝきまつしきゝみくされいさりつかしとゝの
とゝつゆされてけりもとなりつのいらしゝ殊まよう給
あつまをとゝしひつく　かもてよおもゝけゆそのひて見えし
うつくよきえ　こなさくさふの内あへし
そゝけさゝみしい　せんとゝしらへうまいてたくしいみとあらと之
母尼もしたゝしさゝみよ花へく　母尼の後悔く
ひへし志まへ人　秘　入道之　母尼後悔して入道のゝみよ志ゝひ
て似合ゆなりゆへかけれゝし共してく
いかゝやも　秘　入道は須く見えしゝ心まゝれとゝ嬉姫のさく
まやゆへしやとて　母尼は後悔ゑへく　明石上は源氏のとゝ
入道の心ゝえゝくかいゝとくおりしもいまいかりま
後にゐてへいゝとく　ーしゝ言とゝくともいゝゆうしくへ入道之
入道かんのひゝそてゝゝみとさひゆらゝ也
然のと母君へさて　明石上の乳母と母君ゆかく
さらしこゝへ

なさしいさかへゝいふかなき　母君乳母なとの鄙しきと入道のをしへし劇
ちかきをとそさしつまもしもくらしともさまのそし
ほとをもすく　五十日にはよいとしかもとをくし　養ひ定
ひそかに記　五十日は一日之　けるの事
いかなるの孫くらしい孫ともに孫とも孫は如何に云一日
五十日の孫うまれてはなれてすくなく本よりの入道のわかりの旬之
すゝの明来　牧沫くおこうひもおこともつさきと申く字
生きしもうて　思ひ入道のかなの乳母ちす神ちう
てしとこそよ給ふかしまらく　同　淺（アサ）ニク　平（ニクム）く
紀ゆう（リウキ）も物くさ十あるしまへのまへ如きより
月日よいてしきゆへへかし申と　物もて　新入道のみへ
抄　入道のすくてう給へ宮ゝは家なり比かなとも事のなる
うしわか心のかそてなし　御かひつくなる竜ゝる思之
やしるをうれひとふうもの　物中なれそへ
入道のみくいそもいまてしと云ぬ源のその消息の比ゆ
此方にの絶まうく入道母君明石とつとの立し鄙さうさ絶を

はなくて云ふのかしるといふは御消息ありて
後のうりしんぬつこと
難波（ナニハ）にはあなく　秘　御祓より源の心のうちをおもひ
紀君より源の御消息の様とこひ難波うしは御使の迫之
難波の祓はこより御禊のまこまく仁徳御代は都ある時
のまこまとといへし
ことらうもし　ことゝつろよ御消息あつらしく仍く難波の
すへは色ゝの気色ちしと申しろしくさとへなれるし御使し
てかゝいつく　思ひも逍遥ゝく御消息あまりといへそうく候之
ことかる所事しようら　同　逍遥
給ひへさへ奈須なかれいの体して逍遥は足緒とあへく
いそれいゝさひぬ　源の入道之
うらやむの人てを　源の御消息のへしなり
女君もれもれその人よるしもそは給へ気
いよゝそれよきの御ぬし源にかしるとのやうに　皆此御消息の趣旨
いとうたなしといふ　女君のこのみはなしのかれまいて旬之

をこしたまへることそ　秘すこし髪のすそもえさらく

けんかうなる　源の宰相の君つゝましうなりけり

又のあしたとう参り　明よしのまうけ人くるしう見えて宿へ

まかりぬとて　秘三よりてにはかの事よし侍しなむえして

その人々おもへすとも　秘明よしの御文よしとどめてける

すこしおもしろやかなるを　源の明よしのしとのぞみ御あづかりさし申

わざとなき宰相のたまへるに御返事して奉るとにはしたるうちに

ことさらにあきらかにたまへる源

[illegible]とらうる文たまひしかは源の中納言の家のゆへにこそ御心なれ　秘門　花門

秘なりし浅くもうらみあふよなき

おほきさらにて　源の御ふ申く

うらみなくさに　花　うらみなく

秘　宿の弁くときゝて宰相に申しかゝるあるかたもとて

かはゆく宰相もとて心細くなる段しけれ

えうえし世中にはいてこらえかへし　宰相なんとして三年

世をそむかれしいとかはれすして心のうちへいそへし

今更のことゝてみえむと思ひしに　秘世中のうちおそれてたゆたふ宰相の

みそかに世間おぼつかなくてもえうたてもかなしかりしさ世中

なからさらに

かくさたうかりしは御らむしける　花　配流の人召還し後六義のから

出身あるべき後に叙せらるべき勅の後かゝる時に叙しておはしける絶

二位三位とて参議ばかりして別勅とかいまはすまじくとぞあるに

よりて源氏のさては元のまゝ出身の後に叙位ありけり絶の官位

ようありて源氏はける前の位にて参議の大将なるまへなる納言位おはす

ことありて権大納言にて上るいかゞ

宰相中将とぞいへる参議はいまだ流罪の人々にとりて叙爵ありけるをとこそ

然るべきは法のちやう死罪ならぬよしにてそとの参議の大将なり

あらはさるゝ

たゞうちの権大納言にてよろづのすけ

今の文のごとくあるは二人の中に叙せらるゝのちよもはせの権のままとなるなり　花　職員令云大納言二人

つまくし寛平遺誡云大納言で欠過権正二人云々遺誡の人しも二人

の中よ権官をあらたゝく定めむ者の外を通といふなり権ノ字を加

らへこによりて源氏も権大納言といはれまうく中にはよりハ大
元 納言ハ正二人権十一人まてなれり
其の正の外権よりなりあつまりて之と上古ハ大納言の数二人寛平
秘 遂減よハ正権二人ニ花高ニ奏し中にありハ正二人権十人之ニと
大納言ニ首ハ二人く花高どもより者後ハ源氏の人ハ源て紅覇
なり始くすへ之改定ハ清きり罷ありしさによ従くれのこ
従の大臣ニ加給く大納言ニゆしハ二人く源氏ニ剰任かくて
按玄卿補任寛平九年大納言ニ正二位藤原時平一人之六月十
九日重厩并源光此為人同日ニ任権大納言ニ以
此始く これて後撰て出る元
同 大納言ハ定員今云四人相当従二位寛元年為正二人其後権反加増
ニ今御定ハ納言為十人　天武天皇元年改御史大夫為二人
為大納言ニ淳和天皇天長五年二月八日夏野始任権大納言ニ
永観元年八月始置四人　長和郡子六月又並為人藤原教通加任
文慶雲二年四月十七日勅曰徹官員令大納言四人職掌既比
大臣官位中納言ニ二人以補大納言ニ不足同日勅大納言ニ二員為

定更置中納言ニ三人以補大納言ニ不足也乃定千中納言ニ充者
是令外之公卿正員者大政大臣左右大臣各一人大納言ニ二人中納言
三人参議八人合十六人寛平年遂減勅く公卿正員代く増てよ
つまくか増せすてく　且大納言ニ増減其見端仍是源氏権大納言ニ
加任せしめしけくし無く不少わの大納言ニハ権大納言ニとしなりけるに
正員ゆくそのニハ一すつあり大納言ニしよりし権大納言とも
とくへそれ権大納言ニその員加りて権加任せしめしもあらそく
はさくくの人に　次座の捕く従事の事のく
秘 かまて大淳てけられしくてし
まもニ両ひにて本の書になって　河首周公勅首王家権千印人其
及卿今天勤威以款周公之徳　鳳凰以感以　朕小子去迎我
国家礼亦宜之王出郊天止雨反風禾則尽起二公命下郊人
凡禾所偃起而築之歳則勲書　寒而次更複抜樹繫案
使日本記
然しわたくしかしまに　源のさしょく
社ひまかせかゝく　源氏勅喚よ藉へて毎しまぬて

はるそのにしきかし多　秋なるなしの錦く
むもしく風　きくさし多かさりなんし於花の匂ひよりはふ
いかなるなん十
うてしとけりきさん　花と牡丹く
源子若さんとおもふものしおかさきくしく
いさかれに　天子のいしくあかすて　他郷とみゆて
清花也とて　朱雀の地阿ちくいのちみて枕しくされしてあせく
十五夜の月　於八月十五夜しやし月仮京兆

引馬文庫

国立公文書館
National Archives of Japan